

いる。ただ男爵薯・メークインに偏っており、料理特性を持った新品種の普及も望まれ、生産と料理が直結している家庭菜園は良い場所であろう。

2. 植付け

切断直後に植付けされるが、切断は様々で頂部の目を大切にするため、この部分に切り目を入れることなく、メークインは横に切られている。切り口には木灰を塗布する人が多く、店の栽培パンフレットにも記載されていることと、戦時中の技術指導が高齢者に残っているゆえであろう。

木灰のゆ傷効果は認められず、肥料効果も期待できないので消費者は不必要なものを買わされているので、販売者に対する啓蒙が必要である。

植付け時期は彼岸までに植えれば良いといわれ3月中下旬が多く、植付指標になっている桜の開花時期より以前を考えると3月上旬が適期と判断されるので早める必要がある。栽植密度は株間30cm、畦幅は80cm前後で広い。菜園は地力が高く、前作の残肥も多く、その上大いも収穫を狙って多肥となり、その結果茎葉が徒長して倒伏するため広い畦間が必要になるようである。

3. 茎数の調整

萌芽後茎を間引き1～3本に調整している栽培が多く、薯栽培の常識になっている。そ

の結果いも数が減り大いもが多くなり内部品質が低下する一因になっている。

4. 培土

成育中唯一の管理作業で必ず実施しているものの重労働から不十分で、メークイン等では緑化いもが散見されるが、人力・年齢・農業の体験不足等を考えれば止むを得まい。

5. 病虫害の発生と防除

種薯の品質が向上したためウイルス病の発病率は1%以下と良好で、Yウイルス病が多く葉巻病は希である。また成育中の感染はアブラムシの寄生増殖が激しいため極めて高い。

収量に最も影響する疫病は山間部では発生しているが、平野では被害が見えるような発生は見られない。5～6月の成育時期の気温が疫病発生適温を上回っているのが理由であろう。よって病虫害ではアブラムシ寄生のみであるが、アブラムシは越冬寄主が多く5～6月に猛烈に増殖して、茎葉は分泌物で脂ぎってくる。しかし被害が目に見えず、農業に対する忌避感から薬剤散布をする人は皆無で、無農薬栽培になっている。

6. 収穫と品質

収穫は6月下旬～7月上旬に鍬・スコップ等の手掘りで行なわれるが、収穫の喜びを味わう時でもある。ただこの時50g以下の小さいものは捨てられているので、活用できる料理方法の普及が望まれる。

植物検疫のしおり（抜粋）

農林水産省植物防疫所

植物検疫とは……日本の「緑」と「農作物」を外国から侵入しようとする病害虫から守るために「植物」の「検疫」を行なっています。万が一病害虫が侵入すると、とり返しのつかない被

害を与えることがあります。



輸入禁止品 （略）

輸入検査品 （検査が必要です）

球根類、果樹類の苗木（穂木）、ジャガイモ、サツマイモ、サトウキビなどは一定期間（約1年間）植物のウイルス病検査のため隔離栽培が必要です。

